

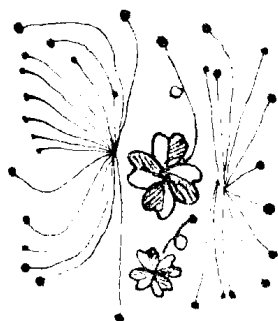
ありがとうさん

死とたたかう愛の対話

原田雄一郎・和子

ありがとうさん

死とたたかう愛の対話



原田雄二郎 和子

筑摩書房

著者略歴

原田雄二郎（はらだゆうじろう）

大正10年生れ。昭和18年9月東京
大学農学部農芸化学科卒。農学博
士。現在協和醸酵工業株式会社技
術部長。

原田和子（はらだかずこ）

大正13年生れ。昭和27年3月東京
女子大学哲学科卒。結婚後は家事
のかたわら東京YWCA学院のア
ドバイザー、保母などを勤める。
昭和45年8月死去。

ありがとうさん——死とたたかう愛の対話

昭和四十七年八月十五日第一刷発行

著者 原田雄二郎
原田和子

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話〇三二九一七六五二代表

振替東京四一二三番

大永舎印刷・積信堂製本

落丁・乱丁本はお取替え致します
©原田雄二郎・和子 一九七二

まえがき

昭和四十五年八月二十二日午前二時七分、私の妻は力つきて、母と私と付添の杉田さんに見とられながら、四谷の胃腸病院で息をひきとった。

一週間前から、氷のかけら一つのどを通らなかつた妻は、渾身の力をふりしぼって、神よりおあずかりした生命の焰をもやした。三度目の脳血栓のアタックで全身の麻痺をきたし、意志をもって動かしかうるのは、美しい双つのひとみだけであつた。その死顔は美しく、敬虔で、信仰と愛と知性にあふれていた。私は黄褐色の妻の頬を丹念に化粧し、土色の唇に紅をひいた。母は静かに自分の娘の髪を櫛くしけずって、その肉体をいとおしんだ。

妻の病氣はがんであつたのである。

結腸がん摘出手術、肝臓転移がん、そして閉塞性黄疸という病名が、直接死因として死亡診断書に書きこまれた。

当時、私は山口県防府市にある工場に単身赴任していたが、三月下旬、東京の妻から、便秘でお腹が痛く苦しいから帰って来てくれという電話をうけとり、とるものもとるあえず帰宅し

た。妻はすでに笹塚の増山外科医院に入院していたが、高校時代の水泳部仲間、板垣修造医師が立会ってくれ、二人の医師からX線写真を見せられて、その場で、下行結腸部位にこぶし大のガンがあることを告げられた。

それから私ども夫婦の闘病が始まったのである。

自分を愛してくれる者を愛したからとて

どれほどの手柄になろうか

罪人でさえ 自分を愛してくれる者を

愛している

ルカによる福音書 六章 三十二

この日記は、病気を発見してから死に到るまでの二人の日記である。奇蹟を望んで私は神に祈りつづけた。妻は死に到るまで、明るく希望と信仰と愛にみちた、美しい闘病の生活を全うした。十六年の短い夫婦の生活が、この五カ月に結集されたように、二人は手を取り合って全力を傾注した。妻は体力を消耗しつくして、なお月余の命を保ったのである。神の恵みと感謝せずにはいられない。

妻の信仰について、その強さと深さに私は驚愕し、取り残されたことを悲しみはしたが、妻

は、いつもと変わらず、私に間接話法で信仰を教えつづけてくれたので、私の望みは絶たれることがなかった。

死の床に横たわる妻のやせおとろえた肉体をさすりながら、私は師の傍らに坐する安堵あんどの氣持を持っていた。そしてあらためて、神に二人のめぐりあいを感謝し、永遠の生命を祈りつづけたのである。

私は妻のために祈った。しかし、妻は私や子供たちのためにどれだけの祈りをしたであろうか。死の床にありながら、彼女は多くの病める者、悲しむ者、思い悩む者のために、より多くの祈りを祈ったのである。私は妻の祈りに必死になって従っていった。私の祈りは罪人でさえ、なすところの祈りでしかなかったのである。いつも、妻は私の師であった。

後のものを忘れ 前のものに向って

からだを伸ばしつつ 目標を目ざして走り

キリスト・イエスにおいて

上に召して下さる神の賞与を得ようと

努めているのである

平素、妻は私が毎夜、日記をつけることを、あまり喜ばなかった。昔話をすることを好まなかった。やることがいっぱいあるとあって、いつも顔を輝やかせて私に語りかけた。後ろを向くことが嫌いなのである。その妻が珍しく、闘病中、日記を綴っていた。

この手記はそれからの拔萃^{ばっすい}である。

平凡な、しかし神に愛された妻と、いつも現世の問題に追われておろおろし、やっと妻に手を引っぱってもらって来た夫との、ありふれた闘病の記録でしかない。

しかし、神の試鍊に対したわが妻の姿勢を、私は、二人の子供たちに知ってほしい、と考えたのである。

病いの床にあって妻がしばしば口にした言葉は、「ありがとうさん」という、周囲の人びとへの感謝の言葉であり、「よかったあ」という明るい、前を向いた平安の言葉であった。

私はこの小冊子を「ありがとうさん」と名づけたと思った。

原田雄二郎

目次

まえがき

I 三病棟二二七号室……………九

こんどは君の番だよ

がんばれ、ミセス・チャック

オコリンボちゃん

II 楽し、わが家に……………壹

ボール紙で作った十字架

結婚記念日

母の日

の贈り物

悲し、津和野の五月

生命は美しい

ママのお祈り

フンガイの手紙

ママのアイデ

イア

痛みに耐えて

一つ目小僧

オイシ

カデス

パパの身体に移したよ

ピラストロ・

オイドクサD線

Ⅲ ひとり病いと……………二六

ふたたび入院 ばらの雨 野尻湖に沈めてあん

だ スープにしないで

Ⅳ 試鍊の日日……………二七

よかったあ ああ、ぶっくらこいた 伊集院さ

んの下駄 ママの誕生日 こちけ、おこして下

さい おちっこ十秒前

Ⅴ 信仰と希望と愛と……………二八

こんな苦しみは私だけに ごっくんは必死の巻

努力が勝ちだよ ヨハネの黙示録 おうちへ帰

して ありがとさん 母と娘 後のものを

忘れ、前のものに向って ママの眼はいつも大きく

美しく

あとがき

ありがとうさん

——死とたたかう愛の対話——

I 三病棟二二七号室

こんどは君の番だよ

三月十六日（月）

和子

相変らず便秘ひどくて下剤のんでも効かない。だんだんお腹が痛くなる。夕方お医者に。夜浣腸。夜中痛くて下痢で二回起きるが大したものは出ず。

三月十七日（火）

和子

遂に朝からおかゆを食べる。でも暖いので洗濯、掃除ハリきる。午後横になっていたら大野さん（YWCA学院時代の級友）からTEL。

三月十九日（木）

和子

鹿子木先生へドイツ語。痛くて学習にも解らない。中学へ。夜中、日赤へ行く。

（鹿子木コルネリヤ先生には和子が東京女子大に在学時代からドイツ語を教わっていた。ここ数年再び先生のお宅で通修を受けていた。）

三月二十日（金）

和子

日赤。河村医院。

三月二十一日（土）

和子

痛む。

三月二十二日（日）

和子

終日痛む。

同月同日

防府にて 雄二郎

○十二・二〇 起床、久々にゆっくりねる。寮で朝昼兼用の食事。のち工場の床屋。近所を少

し散歩。どうも運動不足。帰って部屋の掃除、台所片づけ。大相撲千秋楽をみる。大鵬が三十一回目の優勝。素晴らしいことだ。風呂。

○ママにTEL。便秘で臥せている模様。びっくりする。恭子ちゃん（和子の恩師、松村克己先生の令嬢、当時拙宅に下宿。）の世話になっている。健助（長男、中学二年）と大介（二男、小学六年）の声を聴く。月末の大介の博多遠征にママはついてゆけるだろうか。帰りにここで四人一緒の数日の休暇を予定しているのだが。レコード聴きながら手紙かき。

昭和四十五年一月上旬、私は山口県防府市の工場へ工場長として単身赴任した。昭和四十二年三月、五年の防府の生活を終えて私どもは十年ぶりに東京へ帰って来たが、再度のお勤めであった。妻は防府の様子をよく知っていたが、子供たちの学校の関係もあって単身赴任したのである。二月上旬、妻は約一週間、工場のアパートに来て、私の部屋をつくり上げ、あわただしく帰って行った。妻と私は三日にあげず電話し、手紙を書いた。

三月二十三日（月）

機上の夕陽美し 雄二郎

午前中、三部長と打合せ。十一時頃ママよりTEL。苦しいから帰って来てくれという。原部長、切符努力してくれる。課長会議十二時―十三時。アパートへかえり荷づくり。十四時四十八分急行で広島。空港で全日空十八時十分とれる。二十時羽田着。タクシーで急ぎ帰宅。マ

マはすでに増山医院に入院。X線の結果、下行結腸部クレブス（がん）。ショック激し。友人板垣修造医師の世話により入院した由。若木氏（会社の先輩）にTEL。がんセンター木村先生にTEL。精一兄よりTEL。病院に泊る。ママ苦しむ。恭子姉（兄嫁）来て下さる。

三月二十五日（水）

雄二郎

○七時二十分起床。ママに洗顔してやる。ゆうべの残りの中華マンジュウをたべると、ママがしきりにいいうので朝食がわりに一つたべる。

○八時五十分寝台車来る。二人でがんセンターへ。小田君、山本嘉久君（会社の同僚）来てくれる。三病棟二二七号室に入る。伊藤部長、山本先生とお二人が診て下さる。夕方、木村部長にも御挨拶。ママ早速点滴。時々激しい痛みを訴える。不憫。手術は来週火曜頃の由。十六時頃瀬戸岡のおばあちゃま（実家の母）来る。恭子姉、淳子（姪）、健助、大介来る。

○今日は大介の卒業式。恭子姉が行って下さる。大介は嬉しそうに卒業証書をママにみせる。ママはとても喜ぶ。細い声でいう。

「おめでとう。大ちゃん」

「うん」

がんのことは誰も知らない。知らせてはならない。大介は東大プールへ練習に。

○みんな帰ったあと、ママの顔を拭いてやり、言われたとおりの順番で化粧水をつけてやる。

さっぱりしたと喜ぶ。ママと話す。

ママを残して独りかえる。

同月同日

和子

夜中に三回下痢があり痛くて眠れない。パパを起してトイレにつき添ってもらう。七時頃パパ起きる。がんセンターに移る用意を始め荷物をまとめる。パパ朝食代りに肉マンを一つ食べる。増山先生も気持よく挨拶に来られ、輸血のおかげで顔色がすっかり快くなって元気になったといわれる。寝台車でパパについてもらい、がんセンターに向う。九時四十分頃着く。三病棟二二七号室に入る。鹿村さん、福島さん、土谷さんが同室。乳がんの人ばかり。看護婦さんの高橋さんがいろいろ教えて下さり、また聞いて下さる。室も明るく、看護婦さんも明るくて、がんセンターという暗いイメージが一度に吹き飛んで安心する。主治医は山本先生に決る。伊藤外科部長、木村内科部長先生も診察して下さる。午後車イスに乗ってお腹のレントゲンをとりに行く。この日は絶食。

がんセンターへ入院させるについて、若木部長、山本次長の御配慮をいただいた。通常は一カ月も入院を待つのである。同室の方々が驚き、かつ明日にも妻が死ぬのではないかと思ったそうである。入院の理由をどのように妻にいうか苦慮した。私が勤める会社の医薬事業本部の皆さんが八方手をつ

くして大学その他の病室を探したが、がんセンターしか空いていなかったし、手術が素晴らしく上手であるということで妻に説明した。妻には腸閉塞といってあった。妻は私の言葉を全く疑おうとしなかった。

三月二十六日（木）

雄二郎

○朝食後、家の中を掃除し、ママの机を整理。

○本社へ。桑田社長に報告。社長は私の肩を抱き、涙をうかべて、「こんどは君が看病する番だよ」というて下さる。ありがたくて泣く。高田専務、松沢常務、若木部長、親身になって心配して下さる。

○病院へゆく。十九時三十分までママのそばにいる。そのあと東大プールへ行つて大介を連れて帰る。二人で淋しい夕食。大介を早く寝かしつける。

私は若い頃、肺病やみであった。中学、高校、大学と水泳を通して鍛えてきた身体も結核菌の前には無力であったのである。二年余の軍務ののち、三カ年の九州天草での療養生活を余儀なくされたが、縁あって今の会社に入社した。気胸その他の治療をうけながらの勤務がつづいたが、どうにか仕事も一本立ちできるようになった昭和二十六年の夏、少年の頃から毎年夏には訪れていた信州の野尻湖に、戦後初めて会社の連中をつれて、なつかしさ一杯の気持で出かけた。

私は私の第二の故郷である野尻湖で和子をみつけたのである。連れていった妹の紹介であった。彼